



* M 0 1 2 4 M M 6 0 B C 0 C N A E 2 3 3 7 2 8 9 E E B C 9 7 0 4 4 1 0 4 5 *

24日付 ひろば6版

箱組

校正回数=51

2024年01月17日10時45分28秒

CNAE2337289EEBC970441045

115倍 3× 22行 21

◎サロン

職業を問われて「ライターです」と答えると、何を書いているんですかと聞かれることがあります。

これがなかなか難しい質問です。作家も評論家もジャーナリストも、文章を書くという点ではみな「ライター」かもしれませんが、私はそのどれでもありません。私が書くのは「そういう職業の方たちが書かない類いの商業用文章」というのが最も正しい説明のような気がします。

具体的には、企業や団体の広報ツール用の文章が中心です。パンフレット類のコピー（テキスト）のほか、最近では自社でニュースメディアを運用しているところも多いので、そうしたサイトに掲載する取材記事やイベントレポート、講演録などをよく書きます。英文の元原稿から日本語のコピーを作ったりもします。

文章の作成方法はさまざまで、支給される素材や資料のみから作るときも

民報 サロン

ありますが、やはり一番楽しいのはインタビューです。最近はオンラインでも簡単にでき、それで十分な場合もあります。

でも、相手の心の機微まで理解したいと思えば、実際に会って、耳だけでなく五感を総動員しておこなう取材に勝るものはないでしょう。私にとって、

何を書く人？

忘れられない取材相手はみな、対面でじっくりとお話を聞いた方ばかりです。

一方、話の内容とは直接関係ないことが原因で、記憶に残る取材もあります。それは私が10年前に東京から福島へ来て最初に臨んだインタビューでした。当時応援職員として働いていた自

治体の広報誌向けで、相手は80代の町民ご夫婦。お話が始まったとたん、私は焦りで頭が真っ白になりました。言葉がほとんどわからないのです。同行していた職員が「通訳」してくれなければ完全にお手上げでした。いまの私の福島弁理解度なら8割くらいはわかると思いますけれど……。



中川 雅美

そういうわけで、私の仕事は基本的に他人の頭の中や胸の内にあるものを聞き出して文字にすることです。そして、書いたものが評価される際の第一の基準は読み手に伝わるかどうか。ですから「読みやすさ・わかりやすさ」を追求して推敲（すいこう）を重ねることになります。

でも、ときどき「他人じゃなく自分の体験や胸の内を書きたい」と思うことはあり、それは個人のブログにつづります。それこそ作家でも評論家でもない「ライターの独り言など、大して読まれるわけではないのですが、それでも「この書き方でわかるかな」などと意識してしまうのは習性。ただ、まれに「わかりやすさなんてどうでもいい、湧き出てくる言葉だけをそのまま書きたい」というときもあります。それはなにか大きく感情が動いたときで、結果はたいいてい、下手な詩のようなものができあがります。

昨年、福島に来てから9年間そうやってつづってきたブログを抜粋編集し、「五十路で単身地方移住してみた〜九年間のふくしま暮らし日記」（東京図書出版）という本にして自費出版しました。ご興味あればぜひお手に取っていただくと幸いです。

（福島市太田町、ライター・翻訳者）